

研究課題	遠隔システムを活用した協働型課題解決能力の育成
副題	～総合的な学習の時間の交流活動を通して～
キーワード	遠隔 協働 総合的な学習の時間
学校/団体名	公立瀬戸市立効範小学校
所在地	〒489-0917 愛知県瀬戸市効範町 1-1
ホームページ	https://www.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=2310058

1. 研究の背景

瀬戸市では平成30年度から3年間、文部科学省による「遠隔教育システムの効果的な活用に関する実証研究事業」に参加をしてきた。市内の26校あるすべての小中学校には、各学校間を簡単につなぐことのできる遠隔システムが導入され、日本語教育については優れた成果をあげることができたが、現在は日本語教育以外で今後遠隔教育をどのように進めていったらよいか課題となっている。また、令和2年2月に全校児童にタブレット端末が配布された。各クラスの授業の中では積極的に使う場面も見られたが、タブレットを使って子どもたちにどのような力をつけていくのかまでは、追求されていない状態である。

令和3年度には、同じ中学校ブロックの3つの小学校が、自分たちの住んでいる地域の歴史や産業、環境等に目を向け、地域の良さを知ることがを目的に交流をしてきた。しかし、それはまだ、交流するというより発表をお互いに見るといった域を出ていない状態であった。令和4年度は、3年度の実践を踏まえ、児童から生まれた課題について遠隔システム等を使って小学校間で話し合い、意見交換や発表をし、他者と比較し自分たちの地域の良さや特徴をさらに理解させるようにしていきたいと考え、研究を行ってきた。

2. 研究の目的

本校がめざす協働型課題解決能力とは、①課題発見力②協働力③情報収集力④対話力⑤表現力の5つの要素から成る能力であり、「仲間とともに自ら学び考え生き抜く力」を育むために教師主導ではなく、児童自らが考えることによって5つの力を育成していきたいと考えた。本校の児童は、令和3年度の全国学力学習状況調査の結果において「課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という問いに関して、国の平均を大きく下回った。また、子どもたちの学校生活のアンケートによると、「授業は先生の話聞くより、自分たちの意見を言う方が多いと思う」という問いに対し、「そう思う」と答える児童が極端に少ないという状態であった。これらのことから、未だに教師主導の授業が多く行われていることが明らかになってきたため、子どもたちの学びの質を変えるためには、間違いなく授業改善が必要であると考えた。また、教師の授業改革・意識改革とともに、児童自ら学習課題を立て、それを追求していく力を子どもたちに身につける必要もある。そのために、課題を追求する過程で遠隔システムやICTを活用し、専門家の意見を聞いたり、児童同士が意見交換を行って多様な考え方を学んだりしていき、子どもたちの力を伸ばしていきたいと考えたため、遠隔システムを活用し、協働型課題解決能力を育成したいと考えた。

3. 研究の経過

本研究は、第1学年～第6学年までの全学年の総合的な学習の時間や生活科で実施した実践研究であるが、ここでは、紙面の都合上、第4学年と第6学年の実践を取り上げて記載することとする。それぞれの取り組み内容や評価のための記録等は以下の通りである。

第4学年の研究の経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
4月	児童の実態把握	アンケート調査（児童）
9月	天草市立本町小学校（以下：本町小）との遠隔交流に向けた準備を開始	観察記録・写真（児童）
11月	遠隔交流実践①	観察記録・写真（児童）
1月	授業参観でグループごとに保護者や他の学級の児童に向けて発表	観察記録・写真（児童） 投票（児童・保護者）
2月	遠隔交流実践②	観察記録・写真（児童） アンケート調査（児童）

第6学年の研究の経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
昨年度末	児童の実態把握	アンケート調査（児童）
9月	同じ中学校ブロック内の中学校1校、小学校2校と遠隔交流実践①	観察記録・写真（児童） アンケート調査（実践者）
10月	発表に向けた準備を開始 パンフレットを作成	観察記録・写真（児童） 制作品（児童）
11月	小学校2校と遠隔交流実践②	観察記録・写真（児童）
1月	代表児童が市役所へ赴き、「夢のまち」について、市長や市役所職員へ発表	観察記録・写真（児童） アンケート調査（児童）

4. 代表的な実践

○ 第4年生の代表的な実践

『お互いの地域のすばらしさを伝え合うことで、遠く離れた縁ある学校間の交流を深める』をテーマに、4年生は熊本県天草立本町小学校（以下：本町小）と遠隔システムを使った交流を行った。熊本県天草市は、本校のある愛知県瀬戸市と交流連携協定を結んでおり、その縁あって普段話すことのできない児童どうしの交流を図ることができた。しかし、4月に行った発表についてのアンケートでは、「発表するのは好きですか。」という項目について、およそ6割の児童が、「好きではない」「あまり好きではない」と答えていた。また、「友達の発表を聞くのは好きですか。」という項目については、半数の児童が「好きではない」「あまり好きではない」と答えていた。このことから、発表に対して、ネガティブな考えをもっている児童に興味をもって取り組んでもらうため以下の2つのことを実践した。

代表的な実践4-①

1回目の交流を通して、各自が興味をもったことを出し合い、同じテーマを選んだ児童が集まってグループを作り課題解決に取り組む。

代表的な実践4-②

1月の授業参観で保護者や他のグループへ発表し、投票で代表を決めて本町小に発表する。

○ 実践4-①について

11月に行った本町小との遠隔交流実践①の際に、お互いの学校や給食、方言などの紹介をした。その中で、自分の住んでいる地域を紹介する時にもっと知りたいことや、一番伝えたい物を決めさせた。すると、「食べ物」「観光地」「歴史」「産業」の4つのテーマにまとまったため、調べたいものが重なった児童が集まって発表準備がスタートした。(①課題発見力)



写真1:再検討している様子

児童は、自分たちで決めたテーマについて、タブレットで調べながら、keynoteにまとめた。(③情報収集力) 児童によっては、グループの中だけで知識を共有するのではなく、他のグループの参考になりそうな情報を見つけると「このサイトに愛知県の公園の一覧が載っているよ!」などと進んで共有しようとする姿が見られた。(②

協働力) また、写真1のように各グループでまとめたことをクラス内で発表して、良い点や改善点を伝え合い再検討した。(⑤表現力) 「スライドのアニメーションを付けすぎでわかりづらいからもっと減らしたほうがいいんじゃない?」「字が小さくて後ろからだで見づらいな。」といった改善点を伝える声が多く聞こえた。(④対話力)

○ 実践4-②について



写真2:発表を聞いている様子

1月の授業参観で、保護者や他のグループの児童に向けて発表を行い、投票をしてもらって本町小との遠隔交流で発表するグループを決める計画を立てた。そのことを児童に伝えると、今まで以上に詳しく調べたり、相手にもっと上手く伝える方法はないかと模索したりしている児童も多く見られた。(③情報収集力⑤表現力) 写真2

からわかるように、授業参観当日の発表では、投票を行うため自分たちのグループの発表だけでなく、発表が終わってから他のグループの発表を一生懸命聞いて、良いと思うグループを選ぼうとする意欲も見取れた。(②協働力) 発表を見た保護者からは、「どの班も、一生懸命調べたことがわかった。」「全部の班を選びたい。」という声が聞かれた。

本番の遠隔交流実践②では、愛知県の魅力として以下の内容について発表した。(写真3)



写真3:本町小との交流

グループ	内容
食べ物	あんかけ、味噌、ひつまぶし など
観光地	東山動植物園、ジブリパーク、名古屋城 など
歴史	三英傑 など
産業	自動車産業、せともの など

発表を終えた本校の児童は、「他の学校や地域とも交流してみたくなった。」「相手の発表の仕方が上手だったのでまねしたいと思った。」などと話しており、本町小の児童からは、「愛知県

の魅力がよく伝わってきた。」という内容に関する感想の他にも、「スライドが見やすかった。」「わかりやすかった。」など、発表の仕方に関する感想も多く聞かれ、児童達は、充実した表情で聞いていた。(④対話力⑤表現力)

○ 第6学年の代表的な実践

自ら探求を行うことで主体的に取り組むことができるよう、小中連携で行っている『誰もが住みたくするような、夢のあるまちづくりをめざして』という共通のテーマのもと、夢のあるまちを紹介するパンフレットを作成し、2つの小学校の児童と1つの中学校の生徒や市の職員へプレゼンする形で研究を進め、以下の2つのことを実践した。

代表的な実践6-①

現在の瀬戸市の問題点から探求するテーマを考えたり、プレゼンのイメージをもたせたりするために、初めに中学生からの発表を聞いてから探求学習を行う。

代表的な実践6-②

ブレイクアウトルームを用いて、作成したパンフレットをプレゼンする。

○ 実践6-①について



写真4:中学生に質問する様子

まず、現在の瀬戸市の問題点について深めたり、プレゼンのイメージをもたせたりするため、9月に行った3小中学校での遠隔交流では、中学生が小学生に『夢のあるまち』についてのプレゼンをした。その発表を聞いて、思ったことや考えた問題点などをまとめた。

(写真4)「瀬戸市の人口が年々減っている」「高齢化」「地域の伝統的な祭であるせともの祭に県外や海外からの訪問客が少ない」とい

った問題が挙げられた。そこで、『特産品であるせとものを中心とし、瀬戸に人を呼ぶためのパンフレットづくり』を学校のテーマとして設定した。(①課題発見力)

その後、グループごとに分かれてタブレットを用いながら、パンフレットの内容や構成、形式などについて考えた。(④対話力)ここでも上記第4学年(実践4-①)と同様に、グループどうしで情報を共有するなど、グループを超えた交流を図ることができた。(②協働力)

タブレットで探求を進めていく中で、「日本語のパンフレットを作っても外国人は呼べない。」と気付いた児童がいた。その発言をもとに、他にも配慮すべき人を見ると、障がい者やお年寄り、子連れといった意見が出たので、まずは、対象者を決めてからパンフレットの内容をまとめていくことにした。具体的には、主に以下の通りである。(①課題発見力)

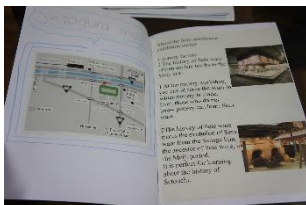


写真5:外国人向け

対象者	内容
外国人	路線図、カフェ、美術館、(英語) など
障がい者	障がい者施設、点字ブロック、音響式信号機 など
お年寄り	ゆっくりできる場所、(文字を大きく書く) など
子連れ	陶芸体験できる施設 など

(写真5)「外国人向けのパンフレットは、説明をシンプルにしたほうがいいかな?」「お年寄り向けのパンフレットは、文字を大きいほうがいいね。」など、対象者が決まったことで、相手を意識してより具体的に内容や形式を考えて作ることができた。(⑤表現力)

○ 実践6-②について



2つの小学校へ、完成したパンフレットをよりわかりやすい形でプレゼンする方法として、ブレイクアウトルームを用いた。ブレイクアウトルームは、少人数で交流ができるため、全体へ説明するよりも相手に自分の伝えたいことが伝わりやすい。(写真6)各校2人

写真6:ブレイクアウトルーム ずつの計6名で行ったため、普段教室で話し合い活動をしているように交流することができた。プレゼン後の意見交換では、以下のようなやりとりが見られた。

児童	会話記録 (一部抜粋)
A (本校)	「一つ悩んでいることがあって…説明するときに、さっきのところ、今時の若者という言い方がいいのか、最近の若者という言い方がいいのか、悩んでいるんですけど、どちらが良いと思いますか。」
B (相手1)	「僕は、今時の若者という言い方の方が良いと思います。理由は、テレビでもイマドキという言葉聞くことがあるからです。」
C (相手2)	「私も、イマドキ女子とかって特集を見たことがあるからそっちなかと思います。」
A	「ありがとうございます！今時の若者にします。」

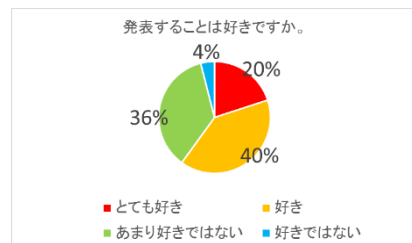
事後の感想では、児童Aは、「迷っていたことを相談できて、アドバイスをもらえたので、さらに良いプレゼンができそうです。」と記述していた。(③協働力④対話力⑤表現力)

5. 研究の成果

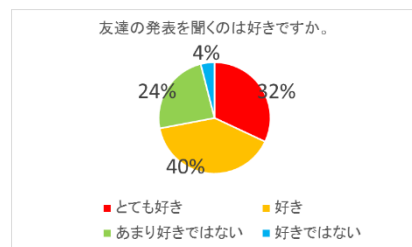
それぞれの研究を終えて、児童に4月と同様の発表に関するアンケートを改めて行った。

○ 第4学年の実践について

「発表することは好きですか。」という項目について、6割の児童が「とても好き」「好き」と答えていた。(資料1) また、「友達の発表を聞くのは好きですか。」という項目については、およそ7割もの児童が「とても好き」「好き」と答えていた。(資料2) これは、4月のアンケートに比べてどちらもおよそ20%の児童が増えたことになる。このことから、発表に対する苦手意識を取り除くことができ、発表を意欲的に行えるようになってきたことがわかる。そして、4年生の代表となって本町小へ発表するという目標のもと、調べたことをわかりやすくまとめ、遠隔システムを通じて相手に伝わりやすいように表現方法をお互いに見合いながら工夫している姿も見ることができた。児童からの声に、「自分たちで課題を決めて一つのことを調べて、それを相手に伝えたら伝わって驚いてくれたので嬉しかった。」という感想があった。



資料1: 4年生発表に関するアンケート①



資料2: 4年生聞くことに関するアンケート

○ 第6学年の実践について

「授業は先生の話聞くより、自分たちの意見を言う方が多いと思う。」という項目において、6割を超える児童が「そう思う」「少しそう思う」と答えている。(資料3) 実践後の児童からは、「初めから自分たちでやれたので楽しかった。他の教科でもやりたい。」という声も聞かれた。

このことから、児童は先生の話聞くよりも自分たちで課題を設定し、意見を出し合っ解決していくことに喜びを感じるようになったことがわかる。

夢のまちを紹介するパンフレットを作成する際にも、お年寄りや外国人、子連れなど誰を対象としたパンフレットなのかを考えることができ、その対象によってパンフレットの形式が変わることにも気付くことができた。

○ 総括

この2学年の実践どちらにも共通することは、『自ら課題を発見し、課題の解決に向けて仲間と協力しながら情報を集めてまとめる。そして、より相手に伝わりやすい表現方法を考える。』という点である。

実践研究の成果をより深く知るために、3月に実際に指導にあたった全学年の教職員29人を対象にアンケートを実施した。(資料4)『本校がめざす「協働型課題解決能力」は、育成できたと思いますか。』という問いに対して、29人全ての教職員が「そう思う」「ややそう思う」と答えている。その理由として、「自ら課題を発見して、それを解決しようとする姿がよく見られた。」「遠隔を行うことで、もっとたくさんの人と話したい、つながりたいという気持ちがあると感想に書いている児童が多数いた。」と答えている。他にも、「学級の諸問題を、自分たちの力で解決しようとする姿勢が見られた。」と、研究の成果を学校生活の中で感じている教職員もいた。

以上のことより、児童は、本校が考える協働型課題解決能力を向上させたと考える。

6. 今後の課題・展望

実践をしてみて、課題の発見を児童が主体的に行うことは難しく、一部教師の手助けが必要な児童がいた。そういったことから、多くの児童の協働型課題解決能力が向上したとはいえ、全ての児童の力が向上したわけではない。今後は、そういった児童へのアプローチの仕方を考えて研究を進めていく必要があると考える。

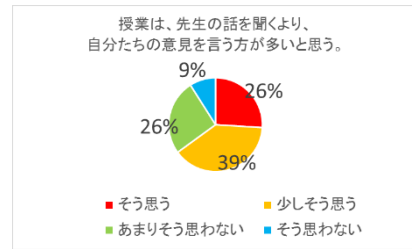
また、6年生児童の声にもあった「他の教科でもやりたい。」という声を大切にして、総合的な学習の時間や生活科以外でも取り組んでみたいと思う。

7. おわりに

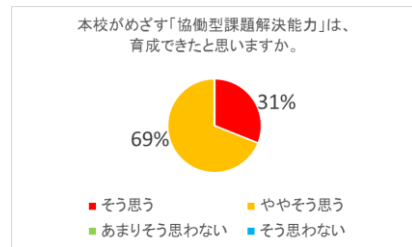
本実践研究をするにあたって、実践する場を与えてくださったパナソニック教育財団関係者の皆様、指導・助言をいただいた木原俊行氏(大阪教育大学)をはじめ、オンラインサポートチームの皆様がこの紙面を借りて深く感謝申し上げたい。

8. 参考文献

- ・文部科学省(2020)、『遠隔教育システムガイドブック(第3版)』



資料3:6年生発表に関するアンケート②



資料4:教職員を対象にしたアンケート